

幼児の音楽表現指導についての一考察

－音環境と器楽アンサンブル分野の考察－

篠田 美里（芸術学）・白井 史子^{*}（芸術学）

はじめに

平成 23 年度入学生から保育士養成課程のカリキュラム改正がなされた。音楽に関するカリキュラムでは、基礎技能から保育の表現技術と変更になった。昨年度はそれに伴い授業内容を新しく構築した。今年度は新しく改訂された幼稚園教育要領の保育内容「表現」の音楽表現分野について新たな授業カリキュラムを構築する目的で、幼稚園での観察調査をした結果を項目別に検証していくこととした。

今回は幼児の毎日の生活の中でもっとも身近な「音環境」と、幼児の音楽活動に欠かせない「器楽アンサンブル」を選んだ。音環境については、篠田が、器楽アンサンブルについては白井が調査及び執筆をした。

I 音環境について

近頃、学生や高校生をはじめとする若者は、常にイヤホンを入れた状態で行動しており、自然界の音に「みみをすます」という生活習慣はほとんど無くなったと思われる。また、音量に対しても「調節が出来ない!」と感じる場面に出くわすことが多くなった。例えば、公共の場において隣の人と話す声の音量と数メートル先にいる人と話す音量と変わらず、隣同士でも大声で話す集団や、やたら大声で辺りを構わず奇声を発する集団に出会うことがある。絶えまない騒音の中で生活している現代の若者の重篤な病とを感じる。この例から見ても、いかに聞く音より聞こえる音（聞こえてしまう）の洪水が大きいか、と、被害を感じる。

幼児が生活する場においても、朝目覚めた時から夜まで、さらに、眠ってしまっている間にも音量の差は有るにせよ絶えず音の洪水の中で生活している。自然から得る音環境に対しては、もはや幼稚園教育要領の表現の部分に記された「毎日の生活の中で、そこに限りない不思議さや面白さを見だし、心を動かす体験をし、感性を育てる」といった音に対する感覚は、程遠くなってきていると感じる。さらに、その環境の中で生活している学生も、若い保育者もピュアな感性を失いつつあるのも当然といえる。

保育内容「表現」感性と表現に関する領域のねらいを達成するにあたって「幼稚園においては、日常生活の中で出会う様々な事物や事象、文化から感じ取るものやそのときの気持ちを教師と共有し、表現し合うことを通して、豊かな感性を育てるようにすることが大切である」としている。また、内容の(1)に「生活の中で出会う様々な音・色・形・手触り・動きなどに気付いたり楽しんだりする」とある。これらを満たすにはどのような点に留意すればよいのか？ また、保育現場ではどのような環境を設定すればよいのか？ 保育者はどのような配慮が必要なのか？ などについて現場の実践の様子を知ると共に、実際、幼児はどの様に捉えているのか？

などについて現場の様子を観察調査することとした。

観察調査期間

A 幼稚園 2011 年 9 月 B 幼稚園 10 月 C 幼稚園 11 月 D 保育園 2012 年 2 月 の各一日 2～3 時間

住宅地にある 2 つの幼稚園 A.C と

自然豊かな広陵地にある幼稚園 B と田園の広がる住宅地にある保育園 D

^{*}東海学院大学短期大学部非常勤講師

1. 現状

①学生の方

筆者の授業（音楽表現）受講の学生や、幼稚園教諭免許更新（音楽表現）受講者に、音遊びの一例として、コップに水を入れたり出したりしながらふちを棒でたたき、音が変わる様子を体験してもらった。学生はもとより、免許更新講習に参加した保育者も驚き、おもしろがり、興味をもってためしてくれた。毎日の生活の中で、ポットにお湯を入れたり、ペットボトルの大瓶に水を入れたりといった作業が少なくなった利便性の良い現代の生活からは、生活の中や、自然の中での音の面白みに気付けない環境にある。もう一つの例は、マラカスエンドウというえんどう豆の鞘が膨らんだような植物がある。この種が熟すと菜種の実のような黒い細かな粒が残る。これを鳴らすとマラカスのようなきれいな音がする。この音に学生は「きれいな音!」と、とても興味を示した。自然の持つ美しい音に素直に反応できる学生の感性にほっとした。勿論、免許更新講習受講者も興味を示し、ほとんどの方が種を持って帰られた。しかし、こちらはきれいな音なので教材の一つとして利用しようとの意味合いもあったであろうと推察する。いずれにしてもとても魅力的であり、心を和ませてくれる植物に出会い心が躍った体験であった。

一方で大きな青桐の葉っぱが枯れ、校内のあちこちに落ちている。その葉っぱを踏んだ時のザクツという音に学生はびっくりしていた。予想もしなかった音に出くわし、驚いたようだった。

この様な学生の方姿に接し、自然の中での音や生活の中での音に意図して興味を持ち、豊かな感性を育てていく必要性を感じた。

②幼稚園の方

A 幼稚園 9月まだ暑い頃、水遊びを楽しんでいた。水道の先にペットボトルを付け、水量の変化を楽しんでいた。当然、水圧によって受けたバケツに当たる音が違い、バケツを空にしてはゴーツという音と水圧を楽しんでいた。

うんていとジャングルジムが一体となった遊具、偶然、側にあった長しゃべるが触れた。ゴーン〜という鈍い音が響いた。傍らにいた女兒

らがにっこり微笑み長しゃべるを持っていた男児にもう一回、もう一回とせがみ、楽しんでた。

B 幼稚園

自由遊びの時、大木の下、ススキのような植物が茂っている場所でもまごとしている男児のグループがいた。少し離れて見ていると「なにしとるの?」と尋ねてきた。「風さんとお話してるの」と答えると、「ふーん」といって寄って来た。そして、「風の音するねー」仲間も集まって来て、「こっちのほうがいい風やよ」「しーっ」「ザワザワッ」にっこり顔をみあわせて「サワサワサワッ」「ねっ、良く聞こえるでしょ。ぼく前にも聞いたもん」と教えてくれた。大木の下、木々に囲まれたちょっとした秘密基地のような空間であった。

C 幼稚園 11月

落ち葉で遊んでいた。街路樹にあるマロニエのような薄い大きな葉を力強く踏んで楽しんでいた。さらに、踏んずけた後の軸を持って周りの木の幹をたたいて回っていた。次に室内で女兒がついたてに見立てた机の影でトライアングルやタンブリン、カスタネット、さらにどんぐりの入った箱、小さな木の実?草の実が入った箱を鳴らして「なんの音?さがしっこ」(子ども達が付けた遊び名)遊びをしていた。

D 保育園 2月

園全体が表現教育を取り入れている。子ども達の歌声も自然な発生で美しく、きれいな響きで素晴らしい歌声である。保育者が奏でるピアノはとても正確で、レベルが高く、情景をイメージさせるようなやわらかい響きで丁寧な奏でられていた。呼吸法を大切に、身体を開放し、呼吸と動きを合わせた歩行ができていた。1歳児、野鼠の手遊びにあわせ「チュウ」の部分にっこり微笑んでまねする。

園庭のあちこちに音遊びの素材が配備されていた。たたくと音が出る板切れ、素材の異なる音の出る筒、そして、身近に撥となるものがさりげなく置いてある。雨が降ると軒先に缶を並べて音を楽しむそうだ。(何回か訪れているが雨の日はなかったので見てはいない)また、ペットボトルに小豆やビーズ、どんぐり、硬い厚紙の切れ端などが入ったマラカス風のものも置いて

あった。

2. 考察

2010～2011年にかけて学生に実習園での音環境について質問紙と聞き取りによる調査を行った。質問紙の調査結果は学生自身が気付かない事もあり、130園のうち音環境を配慮した設定のあった園は3園にとどまった。しかし、聞き取り調査をしていくと、子どもの遊びの中で面白い音を発見した遊びに出会っていた。しかし、それらを含めても18園しかなかった。また、幼稚園教諭の免許更新に集まった教師に講義の中で挙手による問いかけをしたが、意図を持って音遊びのための環境設定をしている園はなかった。(挙手はしづらいたも考えたが、感想文に「様々な音に出会えるよう音環境を設定する必要性に気付かされた・・・」という内容が多数有ったので、ほぼ現状と思われる)

一方で、子どもは遊びの中で、ふしぎだなあ？おもしろいなと思う音に出会っている。

A 幼稚園のバケツの音は見方によっては水量を楽しんでいるとも言えるが、バケツの音遊びも遊具での偶然の音からの遊びでも子ども達は保育者を呼びに行くのではなく(保育者は近くにいなかった)、子ども同士、伝え合い、充分共感しあっていた。勿論、今までにこの遊びは何度も行われていたであろうから、この現象は保育者と共感済みであったとも考えられる。

B 幼稚園の風の音は何度も発見し、すでに子ども達の遊びのBGMになっているのであろう。しかし、心地よい音、何でも耳を傾けたいという音であることは間違いない。とてもほほえましく素晴らしいひと時であった。こんな体験が感性を育てて行くのであろうと感じた。

C 幼稚園では「なんの音？」ごっこが遊びとして成立していたことに驚いた。わらべうたあそびの「あわぶくたったにえたった」から発展したかのような遊びが出来上がっている。しかも、トライアングルとかタンブリン、カスタネットは音色の違いがはっきりしており、名前をまちがえなければ簡単に答えられるものばかりである。それらを比較するところも楽しい遊びとなる要因であろう。この様な遊びを通して楽器と音色がしっかり結び付き、次にトライアングル

のような音や響きとかカスタネットのような音等とたとえに使われるようになる程、子どもに概念として定着していくこととなるのであろう。

D 保育園では園全体が長期にわたって表現教育に取り組んでこられた背景があり、歴史がある。0歳から自然な響きの歌声を聴き、柔らかな響きの伴奏で歌い続けている子ども達は忠実にその歌声を受け継いでいる。また、「耳を澄ます」機会を日々の保育の時間内に設けておられ、毎日、各クラスが20から30分くらいをお遊戯室で過ごす。入室時は静かに呼吸を整えて、音楽に合わせて入場し、呼吸と身体の動きを合わせ、身体を開放する。その後、楽しんで歌を歌う。誰一人私語もせず、ピアノに合わせて身体を動かし、前奏が始まったらその曲を歌う。途中で止めて注意されることもあるが確実に柔らかな響きで誰一人ガナルことなく歌うことが出来る。この体験が心の落ち着きを生み、しっかりと考える要素となり、音の洪水から逃れ、美しい音楽を聴く「みみをすます」機会となっていると強く感じた。さらに、自然の音を大切にし、音に関心が持てるよう環境に配慮しておられる。つまりは保育者の感性に対する取組が如実に現れている例であると感じた。

3. 実践例となる素材の例

音環境に関する分野は、感性を育てる土台となる分野である。素材となるものの遊びを考えてみた。

① 幼児が毎日の生活で出会う様々な音、たとえばパンの上にバターを塗る音、野菜を切る音、ジューサーの音、野菜をいためる音、階段の足音、廊下を歩く音、ふすまを開ける音、ドアの開閉の音等等ひとつひとつが面白く、不思議な音である。これら一つ一つの事象を実体験することと、その発見に共感してくれる大人が周りにいることが重要である。この体験によって絵本やお話の場面の情景が理解できるようになる素材である。

② 絵本のお話に出てくる音を実際に出してみることも楽しい遊びとなろう。また、絵譜を書き、それに合わせた音を出してみる。音を絵譜に表すなど遊びは広がる。

③ 基本的に吹いたり、吸ったりして音の出る

す。演奏曲は、「ぞうさんのマスク」「大きな栗の木の下で」など親しみやすい8小節程度の童謡を選んでいる。

年中組

保育者のキーボード演奏に合わせて、

タンブリン	}	A	♪ ♯ ♯ ♯ ♯ ♯ ♯ ♯
鈴		B	♪ ♯ ♯ ♯ ♯ ♯ ♯ ♯
トライアングル			
鍵盤ハーモニカ		A	。 。
(根音をひく)		B	。 -

大太鼓 ♯ ♯ ♯ ♯ | ♯ ♯ ♯ ♯ ||

小太鼓 ♯ ♯ ♯ ♯ | ♯ ♯ ♯ ♯ ||

5種類の打楽器と、鍵盤ハーモニカ（有音程楽器）でアンサンブルを行い、A、B、2種類のリズムを楽器ごとに順に演奏したり、全体で演奏したりする。また、タンブリンや鈴はトリル（※2）をしながら、しゃがんだり、カスタネットは足踏みをしたりと、動きもつける。演奏曲は「手のひらを太陽に」「線路は続くよどこまでも」など、24小節の童謡で、年少組同様、親しみやすい曲を選んでいる。

年長組

タンブリン、鈴、トライアングルに加え、カウベルやギロ、ウッドブロックを加えた打楽器と鍵盤ハーモニカ、マリimba、シロフォン、グロッケン、キーボードなどの有音程楽器との大編成アンサンブルとなる。リズムやメロディは、パートごとに異なり、10種類の大譜表を使った曲となる。演奏曲は「トルコ行進曲」「ミッキーマウスマーチ」「スターウォーズのテーマ」など、クラシックから映画音楽まで、幅広いジャンルの中から選んでいる。

② 園児の様子と保育者の姿（指導法）

年少組

園児は、保育者の口で唱えたリズムを一斉に打つ。保育者は、リズムを身近なものに当てはめて、「バ・バ・バナナ」とうたう。保育者がリズムを言葉に当てはめて打つことにより、園児のリズムの理解が深まる。また、保育者がカ

ウントを示し、基本のテンポが揺るがないように注意する。

年中組

園児は、年少組と同様、保育者の口で唱えたリズムをパートごとに練習したり、全体で練習したりする。保育者は正しくリズムを打つことが、他のパートとリズムが合うことに気付かせる。また、合図を的確に示し、指揮をする。大きな段ボールや紙で楽器を作り、視覚的にとらえさせる工夫も行う。

年長組

園児は、楽器の準備、片づけを自分たちで行う。年少年中組と同様、保育者の口で唱えたリズムをパートごとに覚える。保育者は絵譜を見せ、リズムと絵譜を結びつけ、長い曲も演奏できるようにする。また、パターンが変わる時の合図を1・2・3・4と指で示す。また、曲のテンポが変わらないように、足踏みをしながら、指揮をする。

2. 考察

現場の状況から、保育者が指導する打楽器は、非常に多いことが分かる。そのため保育者は、①打楽器取り扱いや特性を充分理解し、演奏できる。②大編成の楽譜（スコア譜）を理解し、編成やリズムの工夫ができること。③拍子を数え、足踏みをしながら指揮、指導ができることが求められる。このことから、前述の技能を身に付けた、豊かな表現指導のできる保育者をめざし育てる重要性を感じた。

年少組で、規則的なカウントを取ることに十分時間をかけ、体で感じ、表現し、リズム唱を唱える力を付けることが、年中年長組でのアンサンブルにつながることを感じた。

多くの学生たちは、打楽器をクラスアンサンブルやブラスバンド部で体験してきている。しかし、楽器の特性を充分理解できていなかった。打楽器の特性や扱い方を理解させるため、様々な楽器について詳しく説明したことで、正しい持ち方や打ち方が、打ちやすいことや、リズムを正確に打つことができ、その重要性を感

じ取ることができた。

また、日頃からピアノ譜や童謡の楽譜を読んでいる学生もスコアを読んだ経験のある学生が少なかったため、小節番号を記入し、小節番号をカウントさせながら演奏させた。これによって、楽譜を正確に追いかけることができ、自分のパートを途中で止まることなく演奏し、スコアの読み方や意味の理解につながった。

次に、全休符の時はしゃがむという動作や足踏みを加えることで、楽器同士の重なりやリズムの組み立てを体感し、編成を理解することにつながった。

保育者が大編成の楽譜(スコア)を理解し、編成やリズムの工夫ができ、拍子を数え、足踏みをしながら指揮、指導ができるようにウッドブロック・鈴・タンブリン・カスタネット・トライアングル・小太鼓・大太鼓・マリンバからなる大編成の曲『4歳児用アレンジベートーベンの「トルコ行進曲」』を扱った。

スコアを読んだ経験のある学生が少ないため、小節番号をカウントさせながら演奏することや、動作を取り入れながらの指導を行った。

3. 実践・指導方法のポイント

保育者になる学生が打楽器の特性を理解するため、以下の楽器について詳しく説明する。

大太鼓

- ・大きな楽器であり、曲の基礎となる低音部を受け持つ重要なポジションである。楽器は薄くて軽いものから、直径1m以上のものまである。楽器が大きくなれば、音も大きくなり、よく響く。
- ・皮の中心を打てば、大太鼓らしい響きのよい音が得られる。打ち終わると同時に、速やかにマレットを振り上げる。
- ・音を消す時は、左手を裏皮に当てて止める。カウントは曲全体の柱となるため、体格だけの人選とならないように考慮したい。

小太鼓

- ・響き線は、小太鼓の心臓にあたるもので、「ザーザー」という音をさせて打つ。
- ・腕は楽に動かし、打つ瞬間のみ必要な力だけを入れる。スティックは90°まで上げ、きれ

いな扇を描くように打つ。

- ・強弱の *pp* (ピアノッシモ) から *p* (ピアノ) の場合は打面の向こう側の縁の近くを打ち、*f* (フォルテ) の時はほぼ中心近くを打つ。

シンバル

- ・シンバルに付いている釣革を、手でひねり、裏返しにし、人差し指を第2関節より折り曲げ、親指を添えて、釣革を持つ。
- ・本体に指が触れないように打つ。
- ・シンバルは形が少し丸くなっているため、横から真っ直ぐ合わせると、真空になってしまい、本来の音が出ないので、すり合わせるように打ち、自分の体に押さえつけて音を止める。

トライアングル

- ・音が美しく澄んでいるので、静かな曲に合う楽器である。
- ・左手の人差し指の付け根の部分に掛けて下げるように持ち、底辺の角から2~3cm位離れたところを打つ。本体に手のひらや指が触れていると音が響かなくなり、効果が半減するので、注意が必要。
- ・人差し指以外の指で、本体を握り、振動を止めて、音を消す。

タンブリン (=タンバリン)

- ・持つ時は、皮の上に親指を乗せ、他の4本の指は、下から皮を押し上げるようにする。
- ・人差し指、中指、薬指の3本で中心近くを打つと、張りのある美しい音が得られるが、*pp* ~ *p* で演奏する場合には、端の方の鈴が付いている木枠の近くで打った方が、リズムが安定するばかりでなく、鈴に響き、音がよく出る。
- ・トリルは、手首の回転運動を使って行うが、鈴が平均に振動するように心掛けて演奏する。

鈴

- ・楽器に付いている鈴が多い方が柔らかく美しい音がする。
- ・持ったり置いたりする時に、大変神経を使い、リズム通りに演奏するのも、大変難しい楽器である。
- ・左手で持ち、右手の握りこぶしで左手の手首を打つ。

カスタネット

- ・左手の人差し指。または中指を、ゴム紐の“輪”

に差し入れ、手のひらに安定させる。

- ・右手は、ピアノを弾く時のように、指先を軽く曲げ、手首に力が入りすぎないように打つ。

ウッドブロック

- ・日本式に言えば、木魚のことで、馬が歩く時のポコポコという感じや、時計が時間を刻む音などの擬音としても使われる。
- ・高い方と低い方を使って、カッコ カッコと打つ。
- ・打つスティックによって音色が変わるので、小太鼓のスティックや、木琴用のマレットを使うなどの工夫が必要である。

4. まとめ

打楽器を使つてのアンサンブル指導において、学んでおきたい内容が、幼稚園での観察調査と、本学の学生の授業から浮かびあがってきた。

まず、個々の打楽器の美しい響きは、奏法によるという点に気付き、個々の楽器の特性や扱い方の大切さを認識させること。また、それぞれの楽器の特性を活かしたアンサンブルは音のバランスがとても良く、自分の音や相手の音がよく聴けるようにもなるということ。さらに、アンサンブルにおいて楽器のコミュニケーションを体験することが重要であり、これは、互いの人間関係を築くことにもつながる大切な要素であるということに気付くこと、などである。

二つ目に、スコア譜が読めることが大切である。アンサンブル時にも、パート譜ではなくスコア譜を用いた練習を行うことが効果的であると感じた。

三つ目に、指揮を体験する機会を多く持ちたい。アンサンブルの指揮は多数の楽器のリズムを記憶し的確にカウントを示さねばならない。そのため、まず、人前で相手に分かるように的確に指揮をする必要がある。声楽の授業などと連携をして学生が人の前で指揮をする機会を確保したい。

本学には、カスタネット、トライアングル、鈴、タンブリン、ウッドブロックと、マリンバだけでなく打楽器の種類も数も充実しており、一斉に同楽器を演奏することもでき、アンサンブルできる環境は整っている。上記の点に留意し、

今後のアンサンブル指導の授業を構築していきたい。

おわりに

今回は音楽表現分野のうち「音環境」と「器楽アンサンブル」の2項目に絞って幼稚園・保育園での観察調査を分析した。結果として、やはり、現場で幼児と遊び、共に過ごして調査するのがベストであると深く感じた。現場での様子はとても参考になった。

今回の観察調査でわかったことは、「音環境」について幼稚園・保育園という空間では、外部からの騒音からしっかり守られており、幼児は毎日の生活の中で限りなく不思議さや、面白さ、優しさや美しさに心を動かすことができる環境が確保されているということだった。町の中の騒音も園の中までは入って来てはいない。しかし、其々の園独自の園内の騒音は新たに発生しているものの、感性を育てる環境は整っていると感じた。

器楽アンサンブルについては、幼児の発達を考慮し、年少児では、安定したカウントがとれるようになるまで、安定して身体が動けるようになるまで充分時間をかけ、リズムパターンを数種類の楽器を使って指導している事を知り安心した。いつの間にか音楽とはご縁が無くなり、大学での授業に四苦八苦している学生に出会うたびに、幼少期に適切な音楽教育を受ける必要を感じていた。今後、保育者となる学生にしっかり基礎力をつけて送り出し、どの園でも幼児期に適切な音楽指導が受けられるようになることを切に願う思いである。

今回は「音環境」「器楽アンサンブル」のみの観察調査であったが、他の分野も観察調査結果の分析を予定している。

- (* 1) 打楽器アンサンブルとは、小太鼓・中太鼓・大太鼓・マリンバ・グロッケンなどの打楽器全般を使った合奏。
- (* 2) 主要音とその2度上の音を素早く交互に演奏するもの。ここでは、打楽器を細かく振る奏法をさす。

<参考文献>

猪瀬雅治 打楽器のすべて

株式会社ドレミ楽譜出版社